
White Employing Mercenaries

黎音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

White Employing Mercenaries

【Nコード】

N3225T

【作者名】

黎音

【あらすじ】

傭兵は何も、戦地で人を殺すだけが仕事じゃない。要人の護衛だつて引き受ける。

男なのにISを動かせる織斑一夏を守るべく、相良志緒は銃とISを手には日本へ向かう。

相良志緒は織斑一夏を世界の魔の手から守りきれるのか？

零話（前書き）

勢いで書いてる作品なので、可笑しい点が出てくると思いますが、極力出ないよう気を付けます

零話

突然だが俺には名前がない。傭兵としてのコードネームはあるが、俺という存在に付けられた名前はない。だからコードネームが俺を指す名前になる。

そもそも俺には両親がいない。いや、俺がこうしている以上はいるのだろうが記憶の中には両親らしき人間はいない。

最も古い記憶は俺が育ての親に拾われた時の記憶だ。今でも覚えている。

雪の降る季節で四歳ぐらいの頃だっただろうか。両親とはぐれたか捨てられたかで一人だった俺は、教会から聞こえてきた賛美歌を子守歌に寝ようとしていたところを育ての親に拾われた。それが最も古い記憶だ。

育ての親は傭兵だったから、俺を一度孤児院に預けようとしたらしいが、何故か引き返し俺を育てる事に決めた。教えてもらったのは基礎的な勉強とサバイバル術と、英語、日本語、ロシア語、ペルシア語（アフガン方言）の読み書きぐらいだ。

あとは銃などの使い方か。

「……………昔を思い出したのは久しぶりだな」

どうやら少しだけ眠るつもりが、熟睡していたようだ。此处は既に戦場だというのに我ながらタフな心臓である。

時間を確認してみるが、任務に支障を来さない範囲だ。

周囲の確認をしてすぐに起き出し、森の中を駆け出していく。

可笑しい。

何かかもがすんなりと運び過ぎている。運が良いという事ではないだろうから、どうやら罠のようだ。懷まで招き入れそこで迎え撃つのだろう。

罠だと理解しても俺は走る足を止めようとはしない。傭兵として買われた以上は命令を忠実に遂行しなくてはならないからな。

洞窟を下りていくと扉があった。

中に入ればターゲットが俺を待ち受けているのだろう。愛用の FN Five-seven のマガジンを変え、スタングレネード等の確認をする。

問題ない。

扉を少し開けて体を滑り込めますように中へ入れる、するといきなりスポットライトが当てられた。やはり罠だったか。

気配のする方へ銃を向ける。

「やあやあ、初めましてウルフ君」

与えられた情報によると此処にはターゲットしかいない。つまり、

「篠ノ之束博士だな？」

「ピンポンピンポン、その通りだよ。此処は初めましてと言った方が好感度アップかな？」

「アナタの確保を命じられてやってきた。大人しく従ってもらえないだろうか？」

目の前にいる女性、篠ノ之束博士。

インフイニット・ストラトス

彼女が造った IS という兵器で世界は一度大きく変わった。今では各国の思惑により兵器としてではなく、スポーツとして扱われて

いるが。コアに当たる部分はブラックボックスな為、新しいISを造るには篠ノ之東博士がいらないといけない。つまり彼女を引き入れる事が出来れば、その国は有利になる。

そこでフリーの傭兵である俺の出番という訳だ。

「残念だけどお願いは聞けないかな。それに連れ帰っても無意味だよ？」

「どういう意味だ」

「ウルフ君を雇った組織、壊滅させちゃったから」

朗らかに笑ってるがその内容は衝撃的だ。

契約して俺がこの場に入り込むまで一日の時間を要したというのに、彼女は何らかの方法で契約した組織を壊滅させたと言う。

「確認してもいいだろうか」

「うん、それぐらい良いよ。束さんは心が広いからね」

彼女に攻撃する意思がないのを確認し、組織から与えられた方法で連絡を取ろうとすることが出来ない。

組織と契約した時に“連絡は迅速に。出ない時は失敗したとみなす”と言われている。つまりこの場合、組織が壊滅している事になり彼女が言っている事が真実である。

銃を腰に付けたホルスターに直す。契約した相手がいらない以上は彼女に向けるのは無意味だ。

「失礼した。では撤収させてもらっても良いだろうか」

「駄目駄目だよ。此処を知っちゃった以上はただで帰せないな」

ただでは帰せない。それはつまり何らかの代償を払わないといけ

ないという事で。

「ウルフ君をこの束さんが雇っちゃうんだよ！」
「はあ」

きっと今の俺は何とも言えない顔をしていただろう。

1話

俺が束さんに雇われてから三年の月日が過ぎた。

雇われた内容は傭兵にあるまじき内容で、何故か主夫まがいの事と助手をさせられていた。

そんなある日、束さんに呼ばれて地下の研究室に行くと束さんと、白と黒に近い青でカラーリングされたISが待ち受けていた。猛禽類を思わせる鋭いシルエットで、世界一危険な芸術品という印象を受ける。

「それで、俺を此処に呼んだのはどういう理由があるんだ」

「ふっふっふ、それはね。じゃじゃーん！」

取り出したのは数枚の書類。

それを受け取ってみると俺の事が書かれた書類だと、貼られた写真によって理解出来る。しかし、名前が違った。そこに書かれていたのは俺のコードネーム、ウルフではなく、

相良 志緒

知らない日本人の名前だった。

「しーちゃんに戸籍がなかったから束さんが勝手に作りあげちゃった。ちなみに誕生日は今日にしちゃったからね」

確かに俺は東洋人の見た目をしているから、相良志緒の名前でも問題はないだろう。流石にいきなりあだ名を付けられたのには驚いたが。

「そしてこっちのIS、ARX-7アーバレストはしーちゃんの誕生日プレゼントだよ！」

今まで誕生日とかそういうのに無縁の生活をしていたから、束さんの気持ちは嬉しいが少し待ってほしい。あまりの出来事に脳が追いつけてない。

深呼吸を何度かし、正氣に戻るとふと疑問が浮かんできた。

ISは女性にしか扱えない。

なのに束さんは俺の誕生日にISをプレゼントしてきた。製作者である束さんがその辺りを理解してないはずがないのだが。

「この子はね、しーちゃんの為に生まれてきたISなんだよ。だから男の子のしーちゃんにも扱える。だから触ってあげて？」

「俺の為、に」

アーバレストに触れる。

刹那の短さで頭の中にISの基礎情報から、アーバレストの情報が流れ込んできた。

与えられた情報に従い、アーバレストを身に纏う。

肌の上に直接何かが広がっていく感触——スキンバリアー皮膜装甲展開、完了。

突然体が軽くなる無重力感——スラスタ推進機正常作動、確認。

手に重みを感じると、装備が発光して形成されていく——単分子カッター、展開。

フィルターが取り除かれたように世界がクリアになる——ハイパ

ーセンサー最適化、完了。

アーバレストから与えられた情報から、知りもしなかった出来事を理解出来る。

ラムダ・ドライバと搭乗者、相良志緒の神経パターンの最適化、完了。

全てのアップデートを終了したアーバレストは機能を停止し、俺は抜け出して束さんの前に降り立った。

理由は分からないが束さんがニコニコ笑ってる。

「アーバレストを通して見た世界はどうだった？ 最高？」

「……最高だ」

「むう、しーちゃんは殆ど無表情だから最高か分かりにくいんだよ。まあいいや」

戦地にいる者はみだりに感情を表には出さないものだ。感情を出して敵に情報が知られてしまっっては、仲間が危険になる。

「毎日アーバレストに乗って、情報をちょうだいね。その情報からしーちゃんの特徴に合わせて設定するから」

「了解した」

「さあさあしーちゃん、誕生日ケーキを造るんだ」

「俺の誕生日なのか？」

「私が作ってもいいんだよ？」

「分かった。俺が造る」

束さんに料理を造らせるのはマズい。契約した当初は束さんが造っていたが、中に変な薬なんかを投入するフシがあるから料理はも

っばら俺が造る事になっている。
ネットからケーキの造り方を調べないとな

さらに数年が過ぎたある日。
数年前と同じように地下へと向かう。

「やあやあ、しーちゃんおはようなんだよ」
「もう昼だが」

「束さんはさっき起きたからおはようで合ってるの」

冷静に突っ込むと束さんは頬をプクーツ、と膨らませた。
研究者の生活リズムは崩れやすいと言うが、この人の場合は崩れすぎだろう。二日三日起きていたり、二日三日寝ていたりするんだから。

「それでしーちゃんとは新しい契約をしたいんだ」
「貰える物を貰えるなら構わない」
「じゃあ報酬は束さんだ!!」

「さっさと内容に入れ」
「うゝ…：最近のしーちゃんは冷たすぎるよ。ツンドラだよ」

アナタのあしらい方を知っただけで極寒の大地扱いか。この人の友人とか大変だな。

「しーちゃんはニュースを見てる？ “ISを男性が起動させた”
というニュースだけど」

「確か当人の名前は“織斑一夏”、束さんが前から話していた幼なじみだったか？」

「流石はしーちゃん、話が早いね。うん、そのいっくんなんだけど、色々大変な事になると思うんだ。だからしーちゃんにはいっくんの護衛をしてもらいたいんだよ」

束さんはあまり他人に関心を持たない人間だから、束さんが口にした名前ついてある程度情報を集めてある。

織斑一夏、今年で高校生。本人は藍越学園の試験を受けるつもりだったが、道を間違えIS学園の試験を受け合格。この時初めてISを起動させる。肉体、精神ともに異常なし。

俺と同じ年か。ならば護衛などしなくても自分で何とか出来ると思うが、まあ依頼主が護衛してくれと言うなら傭兵である以上は受けるしかない。

「了解だ。ならば相良志緒としてIS学園に入学すればいいんだな？」

「うん。そういった細かいのは私がしておくから、しーちゃんはいっくんをお願いね」

さて、少ない荷物を纏めて日本に飛ぶとするか。

2話

束さん特製のニンジン型ミサイルによって日本に到着した俺は、すぐにIS学園へと向かった。

道中でよく目にしたものは、女性に良いように扱われてる男性の姿だ。ISという兵器は女性にしか扱えない。それはつまり、女尊男卑の世界を造るに十分な理由である。

力ある者が力なき者を虐げるのは問題ない。それが当たり前の世界だ。しかし、ISの操縦者でもないのに威張りちらすのは……虎の威を借る狐、と言うんだったか？ この場合。

何とも情けない。自分が間違っていないのなら噛みつけばいいというのに、ISのせいで男性は牙を抜かれてしまったようだ。

せめて織斑一夏が情けない人間でなければ良いのだが。

ようやく目的地であるIS学園に辿り着いた。

広く大きい学園に似合う、大きい門の下に女性が立っている。あれが束さんが言っていた織斑千冬だろうか。

女性へ近づく度に緩みきっていた精神が、矢を番えた弓のように張られていく。一介の学園教師が持つはずのない威圧感。

この女性、出来る……ッ！

何時でもFN Five-sevenを取り出せるよう、ホルスターの近くに腕を伸ばす。

「お前が相良志緒か？」

「はっ。自分が相良志緒であります！」

体に染み付いた感覚は抜けないものらしく、思わず傭兵時代の受け答えをしてしまった。

織斑千冬らしき女性はそんな俺の受け答えにため息で答える。

「私が織斑千冬だ。……あの馬鹿が寄越した奴だから馬鹿だと思っていたが、まさか傭兵あがりだったとはな」

「傭兵あがりではマズいのでしょうか？」

駄目だ。織斑千冬の前では傭兵のクセが出てしまう。

「いや、むしろ良いかもしれん。ついて来い」

言われるがまま織斑千冬の後を歩く。

………今更気付いたが俺を待ち受けていた織斑千冬はこの学園の教師なのか。ならば敬称を付けなくてはならないが、教官と先生のどちらが良いだろうか。俺のクセを引き出す以上は教官の方が正しいかもしれん。

ISの訓練所に着いた。

真向かいにISを起動させた誰かが立っている。

「まずは貴様の実力を計る試験を受けてもらう。相手は目の前にいる教師だ」

「任務了解。いくぞアーバレスト」

チョーカーが呼び声に呼応して輝き、アーバレストが展開される。どの程度の実力かは知らないが、全力を出すまでもない。

結果、俺は教師を終始圧倒して勝利した。ISの使い方などを教える立場にいるのだから、強いかと思っていたが予想を遥かに下回る実力とは。

アーバレストの性能が高いだけなのかもしれないが。

「この……化け物……っ！」

化け物、か。そう言われたのはいつ以来だろうか。

とりあえずアーバレストを解除して織斑教官の元へ行くと、疲れた顔をして俺の顔を眺めている。

「どうかしましたか？」

「いや、その操縦技術は束から教えられたのか？」

「否定です。全てアーバレストが与えてきたデータから学びました」

素直に答えると織斑教官は更に疲れたような顔をした。

物を教えるという仕事はかなりハードと言うからな。体を壊さなければいいが。

この後は簡単な筆記試験と面接を受けた。結果は早くて今日の午後には分かるらしい。

試験を全てクリアしたので解散となった。

「相良、宿は取っているのか？」

「まだ取っていません」

「ならば私の家に来い。一人くらい泊める余裕がある」

織斑一夏を護衛するには絶好の機会だが、そこまでしてもらおう訳にはいかないだろう。

「いえ、教官にそこまでしていただく訳にはいきません。野宿出来ますので問題ありません」

その為にわざわざ寝袋を持ってきたのだ。幸い日本はまだ梅雨の時期に入っていない為、体を冷やさないようにしていれば問題ないだろう。

食料も公園を探せば鳩や野良動物などが見つかるだろう。温暖化のせいで山から下りてきているらしいからな。最悪、非常食のジャーキーやレーションを食べるから問題ない。

なんて考えていると叩かれた。

「危険人物を放っておけるか、馬鹿者」

「お言葉ですが、使うのはナイフとピアノ線だけです。火器は使用しません」

「それでもだ。もし補導されたら入学は取り消しになるんだぞ」

「ならば捕まらなければいいだけです」

むんず、と首を掴まれた。俺は猫か何かか？

「とにかくついて来い」

「了解です」

前々から聞いていたが、やはり男らしい人だ。

「——という訳でしばらくこいつを泊める事になった」

「相良志緒だ」

「あ、ああ。それは分かったけど、何で猫みたいに連れてきたんだ？」

何故か俺は織斑教官に首根っこを掴まれたまま、織斑家に搬送されていた。

織斑一夏が驚いているのも無理ない。

「こいつが事ある毎に発砲しようとするからな」

「発砲!？」

怪しい行動を取る奴がいたんだ、と口の中で呟く。

路地に入る前から周囲の確認をする者——十八禁の物を買おうとする少年だった——、銀色のアタッシュケースを忘れた者——爆弾かと思ったが、ただ忘れただけだった——etc

「まあ、そういう事でしばらく泊めるからな」

言うだけ言って織斑教官は織斑家から出て行った。

後に残された俺達の間には重い空気が流れている。やはり好意に甘える訳にはいかないな。

「済まない、迷惑をかけたな」

荷物を持って外に出ようとすると、腕を掴まれた。この家には自分を含めて二人しかいない。

「俺がいては迷惑だろう。問題ない、最悪野宿でもするさ」

「相良は何で銃を持ってるんだ？」

「俺は傭兵だからな」

「傭兵って………戦地とかで人を殺すあの傭兵か？」

「肯定だ」

隠す必要を感じなかったから包み隠さず真実を告げると、織斑一夏は一步引いて俺と距離を取る。それが通常の人間が取る正しい行動だ。

確かに俺は戦地で人を殺してきた。銃や地雷、沢山の方法でな。

「此処でも殺すのか？」

「俺はとある人物の護衛を命じられて此処に来た。場合によっては殺すだろう」

「………その人物って誰だ？」

「織斑一夏、君だ」

護衛対象に“護衛対象が君だ”と告げるのは得策ではない。狙われてると知った対象が暴れてしまい、事態が大変な事になってしまうからだ。

それでも俺は真実を告げる事にした。信じてもらうには自分の全てを告げるのが一番だからな。

織斑一夏が深呼吸を一つする。

「………それで俺を護衛するように頼んだのは誰なんだ？」

「篠ノ之東博士だ」

束さんの名前を出すと織斑一夏は盛大なため息を吐いた。かつての幼なじみの名前を聞いたというのに、その反応は可笑しいと思うのだが。それともこういう関係の幼なじみなのか。

「ISを使える男というのは珍しいからな。お前を生態実験しようとする国や組織が出てくるかもしれん。そこで俺が護衛する事になった」

「それを証明出来るのか？」

「いや、出来ない」

信じてもらえるよう、何か束さんから貰ってくるべきだったか。まあ、信用してもらわなくても俺は護衛をするだけだ。

「はあ………分かった、相良を信じるよ。何か相良は嘘が苦手そうだし」

「嘘ぐらい言えるぞ。でないと敵を出し抜く事が出来ないからな」

「はいはい。相良は嫌いな物とかあるか？」

「特にない。あと相良ではなく志緒でいい、その代わり俺も一夏と呼ぶ」

「分かったよ志緒」

何で信じる気になったのかは分からないが、護衛しやすくなったから良ししよう。

定時報告を束さんにしたかったが、何時に連絡するのか聞くのかを忘れていた。時差もあるというのに。

2話(後書き)

FN Five-seveN

全長 208mm

重量 635g

口径 5.7mm×28

使用銃弾 SS90⇒SS190

装弾数 10／20＋1

銃口初速 690m／s

作動方式 銃身遊動遅延ブローバック

メーカー FN社

新規開発の銃弾

使用弾薬はライフル弾を拳銃弾並のサイズにしたボトルネック形状になっている。拳銃弾のようなドングリではなく鋭利な円錐形をしており初速が早く貫通力に優れている。人体などの柔らかい物体にあたると銃弾が横転する為、ストッピングパワーも高い。つまり、ボディーアーマーを貫通し、人体に入ったら横転し傷口を広げるのである。

破格のマガジン容量

拳銃弾と言えば9mmパラベラムや、45ACPが代表的である。これらの銃弾より細長い形状の為グリップの前後幅は増したものの、装弾数は破格の20発となっている。ちなみにコルトガバメントは7発、ベレッタM92が15発である。

ちなみに上記データの装弾数の「+1」というのは薬室に入れた一発も込みの数字。自動拳銃はリボルバーと違い弾倉と薬室が分離している為である。

3話

ネットで情報を集めていたらとあるサイトで流れていた曲を気に入り、一夏に街を案内してもらうついでにCDを買いに行った時にそれは起きた。

俺のCDをかうついでに足りなくなっている調味料とかも買っていた方がいいな。

「それにしても、志緒も曲とか聞くんだな」

「曲は心を落ち着かせたり、興奮させたりする効果があるからよく聞いている」

最近では電子の人工歌姫とかにはまっていたりする。

はまっているのに、こう考えるのはアレだろうが曲を造ってる人は歌えないのか？ 歌えないのなら、周囲にいる人間に楽曲提供し、共に上を目指そうという向上心はないのか？

ネットに上げ、その反応を見て喜ぶのは酷い言い方だが――結局、内輪ウケの延長線ではないと思う。

悪いという訳じゃない。しかし、素晴らしい人は表舞台に出るべきだと思うんだ。

「で、志緒は何のCDをかうんだ？」

「STRAIGHT JETというCDだ」

「ああ、あれか！ あの曲はいいよな」

「ネットを見ていた時にはまってたな」

他愛のない会話を続け、目的のCDは簡単に見付かった。金なら傭兵時代に沢山稼いでいるので、ついでに一夏の分も買っておく。

CDショップを出、家電店の近くを通り過ぎようとしたら家電店の前に人が集まっている事に気付く。しかも何やら驚きの声が上がっている。

何事か、そう思っていると一人の女性が俺に気付いて指を差してきた。

「この人、今テレビに出ていた人じゃない？」

「しかも隣に居るのは織斑一夏よ！」

一人が気付くと、他の人も気付いて次第に俺達は人に囲まれてしまう。

撤退しようにも周囲に人が集まり逃げられない。仕方ない、織斑教官に叱られる覚悟で使うとしよう。

小声で一夏に話す。

「目を閉じていろ一夏」

「ん、何でだ？」

「いいから閉じていろ。悪いようにはせん」

ぶつくさ言いながらも一夏が目を閉じる。それと同時に安全装置を抜いておいた閃光弾を足下に落とした。閃光が弾け、周囲の人間を無力化してその隙に一夏の手を引いて逃げ出す。

家電店からだいぶ離れた通り。

ここまで逃げれば問題ないだろう。

それにしてもさっきの女性達は、どこから俺の情報を手に入れたのだろう。俺を見て“テレビに出ていた”と言ったからテレビから情報を手に入れたのは明らかだが、俺はカメラに映った記憶がない。隠し撮りに気付かない程抜けているつもりはない。気付かなか

ったら戦地でライフルの餌食になるからな。

「さっきの光は何だったんだ？」

「非致死性のスタン・グレネードだ。テロリストを無効化するのに使われる」

銃による威嚇射撃も考えたが、スタン・グレネードの方があまり問題がなさそうだったので使用した。

この事が織斑教官にバレたら説教だろうな。

「俺が有名なのは分かってるけど、志緒が有名なのは何でだ？」

「分からん。誰かと間違えた訳ではなさそうだが」

家電店の前に出来た人集り。考えるに家電店の店頭に置かれた何かから、俺の情報を手に入れたという事だろう。

ふとビルの上に設置されたモニターを見ると、緊急ニュースが流れていた。

緊急特報！

ISを使える男性がもう一人見つかりました！！

その男性は何と、あの篠ノ之博士の助手を勤めていたそうです。

なるほど、一夏以外でISを使えるのは俺しかない。つまりこの緊急ニュースで俺を知ったという事か。

束さんの助手、その情報が流れているという事は束さんが情報をリークしたのだろう。こうする事で周囲の視線を俺に集める………
…そこまで考えての行動とは思いにくないが。

このままだと緊急ニュースを見た人間が俺に気付き、のんびりと
買い物は出来ないだろう。一夏には悪いが今日はもう引き上げても
らうとしよう。

そう提案すると一夏は笑いながら承諾してくれた。心苦しいが、
一夏の為でもある。

買い物途中で切り上げてしまった為、晩飯の材料が足りないの
で一夏の友人の家族がやっているという食堂にやってきた。

五反田食堂。今時には珍しい大衆食堂だが、味は保証する
の事。

暖簾を潜ると美味そうな匂いと、リズムカルに刻まれる音が聞こ
えてきた。かつて戦友と行った中国の料理屋を思い出す。油っこい
料理ばかり食わされて胃がもたれたが、戦友はただ美味そうに食っ
ていた。

「いらっしやい、って一夏か」

「何だよ弾、その言い方は」

出迎えた少年と一夏は知り合いのようらしい。

「別にいいだろうが。それでそっちは誰なんだ？」

「こっちは相良志緒。志緒、こいつは五反田弾って言うんだ」

「相良志緒だ。訳あって一夏の家に居候している」

「ふうん。俺は五反田弾、弾でいいぜ」

「なら俺の事も志緒でいい」

一夏同様に気さくな奴のようだ。五反田という事は、この食堂は弾の家族が経営しているという事か。

案内されたテーブルに座り、俺は“鯖の味噌煮定食”を、一夏は“業火野菜炒め定食”を頼んだ。

頼んだ料理はすぐに出来、食べると実に美味かった。これなら確かに大衆食堂が未だに残るというものだろう。

食事をしていると、いきなり変な男達が五反田食堂に入ってきた。数は五人。どいつも筋肉が発達しており、その道の者らしい。

何やら不穏な空気を感じたので、懷に手を伸ばしておく。ちなみに他の客はとばかりが来ないよう、こっそりとお代を置いて逃げていた。

「おい大将、先日はよくもうちの若頭をやってくれたじゃねえか」

「ふん。くそつたれたガキを殴って何が悪い」

正に一触即発といった空気だ。

何でもこの大将、五反田蔵が以前みっともなくカツアゲしていたガキを叩いたのが事の始まりらしい。そのガキはこの辺りを縄張りとする暴力団の若頭らしく、その仇討ちに來たらしい。正しいのは明らかに五反田蔵である。

そもそもやられたなら、そいつが仕返しに來るべきだと思うんだが。親の威を借りて自由にやりたいほうだいのガキ、甘ったれてるな。

「やれ」

命令された男達が動くよりも早く、懷からショットガンを取り出し男達に発砲する。

だんっ!!　だんっ!!　だんっ!!　だんっ!!　だんっ!!

一人につき一発だが全て命中させ、たて続けに吹き飛ばす。

「周りに気を付けず行動するのは三流以下がする事だ」
「って何を撃ってるんだお前は!!」

バシンッ

男達を止めたというのに何故か一夏に叩かれた。

「そんなの撃ってあいつらを殺す気か!？」

「これはショットガンだが、弾は非致死性のゴム・スタン弾だ。問題ない」

これに本物の実弾を装填し発砲していたら、男達は肉片を撒き散らして死んでいる。

「オメエ、中々見所あんじゃねえか」

「光栄であります」

五反田巖に背中をバシバシ叩かれながら誉められた。

騒ぎを聞きつけてやってきた警察に男達を引き渡し、これでお終いかと思ったがまだ早い。どうせなら完膚なきまでに叩いておくとしよう。

「一夏、先に帰っていてくれ」

「どこ行くんだよ」

「大した事じゃないが忘れ物だ」

五反田食堂を出た俺は裏世界に詳しい奴から情報を買い、さっきの男達が所属している暴力団が経営しているビルの屋上に来ていた。

これより、暴力団の壊滅を開始する。

時計の針が七時を指すと同時に、ビルの一階が小さな爆発をした。防音設備がしっかりとしているので、外の人間は爆発が起きた事に全然気付かないでいる。前もってプラスチック爆弾を一階に仕掛けておいたのだ。

爆発を聞きつけた暴力団達が一階に集まりだすのを確認。

「よし、行くか」

屋上の給水筒に固く縛り付けたロープを使い、屋上から飛び降りて七階にある事務所の窓を蹴破り侵入する。

「何者だ!!」

「答える義務はない」

男達が臨戦態勢に入っている中、一人の少年が今にも逃げ出そうとしている。あいつが五反田巖が殴った少年という事か。

敵が銃を取り出すよりも早くホルスターからFN Five-s
evenを抜き出し、敵の持つ銃を撃ち抜く。

銃を弾かれた事で隙だらけになった男達には目もくれず、少年へと駆ける。何とか自分の身を守ろうと落ちた銃を拾おうとするが、あまりにも遅すぎる。これが戦場ならお釣りが来るぐらい死んでいるぞ。

少年が拾おうとする銃を蹴り飛ばし、肩の関節を極め俺の楯にする形にし、こめかみに銃を突きつける。

「動くな。少しでも不穏な動きをすれば命はない」

「お、お前ら絶対に手を出すなよ！」

「若頭を離せ！！」

この状況で命令出来る立場だと思っているのか？

ゴリッ

少年のこめかみに突きつけている銃でこめかみを圧迫させる。

「何が目的だ……………」

「この街から手を引け。それだけだ」

「それは組長に聞かねえと出来ない」

「だったら今すぐに連絡しろ。さっきも言ったが、不穏な動きをすればこいつを撃つ」

たった一人でここに乗り込んだ思い切りの良さから、俺が本当に少年を撃つと感じたのかリーダー格の男が素直に電話をする。暫くして男が電話を直した。

「組長もこの街から手を引くと言った。だから若頭を返してくれ」

「いいだろう。しかし、またこの街に貴様らがやってきた時は今日の比じゃない戦力で乗り込むと思え。行け」

少年の背中を押して男達の方へ渡す。恐怖からか一瞬こっちを振り向くが、すぐに男達の背後に隠れた。

交渉を終えたので帰ろうとしたその時、殺気を感じたので振り返り、テレビのリモコンサイズのスイッチを見せ付ける。

「これが何だか分かるか？ これはこのビル全体に付けたプラスチック爆弾の起爆装置だ。下手な事をしてみる、ドカンといくぞ」

「そんな事をすればお前だって！」

「俺の名前は相良志緒だ」

いきなり俺が自分の名前を言ったから、男達が一瞬呆れ、そしてすぐに顔が青ざめる。

「ま、まさか世界でＩＳを使える男の一人、相良志緒か！？」

「そうだ。だから死ぬのはお前達だけで、俺は死なない。どうする、一緒にドカンといくか？」

備えなどなしにこんな爆破テロみたいな事をするか阿呆。それに、爆破しても俺にはもう一つの脱出方法がある。どっちにしろ死ぬのはこいつらだけだ。

スイッチのボタンに添えた指に力を入れようとしたら、

「分かった。他の奴らにも手を出させない」

「俺も無益な殺しはしたくないから助かる」

本当に手を出してこないのを確認し、俺は暴力団のビルを後にした。

しかし、これで終わりの訳がない。

あの事務所の引き出しからくすねてきたこのファイルとメモリチップ——中身は麻薬の販売ルートと顧客のリスト——を警察に渡せば全てが終わる。

簡単に信じてはもらえないだろうが、捜査令状を出す理由にはなるだろう。

全てを終えて織斑家に帰ると一夏が麦茶を飲みながら、テレビを見ていた。

「ただいま」

「おう、お帰り。五反田食堂に来たあの暴力団が捕まったってさ」

警察に物品を届けてから一時間ぐらいしか経ってないのに早いものだな。

「何でも麻薬を扱っていたのがバレたんだと。で、調べてみたら他にも色々出て来たって」

「そうか」

結構根深い組織だと思ったが、まだ色々やってたのか。まあこれで奴らは五反田食堂には近寄れないし、しばらくはブタ箱でクサイ飯を食うからよしとしよう。

「それで何を忘れたんだ？」

「……ドブさらいをな」

一夏を傷付ける要因は全て排除しておかないとな。

3話（後書き）

批判・感想待っています

4話（前書き）

何でか志緒が動かない。これじゃただの語り部のような……

4話

今日はI S学園の入学式なのだが、俺と一夏は入学式に参加していなかった。

サボった訳じゃない。

俺達が入学式に出るのに、ある条件を出したら却下されて参加しなくていいという事になったのだ。

入学式に参加する者達のボディチェックをしてもらい、カメラなどの記録媒体の持ち込みを禁止とする。

その条件を飲まれなかった。

世界でI Sを使える男である一夏と俺を、自国に引き入れようとする国があるのは誰もが容易に想像出来る。それでもし、自国に引き入れる事が出来なければ他国に奪われないよう、暗殺をしようと考えてる馬鹿が現れるかもしれない。まだ一夏に関わろうとする国がないので、暗殺を危惧するのは早いかもしれないが、こういうのは早過ぎる方がいい。

一夏を守るのが俺の役目だ。

だからありとあらゆる危険は排除しなければならぬ。

結局、入学式が終わるまで俺達は保健室で過ごし、終わって教室に戻ってくるのに何食わぬ顔で合流する事になった。

そして今はそれぞれの教室で自己紹介をする時間だ。ちなみに俺と一夏は同じクラスになった。何でも織斑教官が裏で色々手を回してくれていたようなので、後で礼を言う事にしよう。たぶん受け取ってくれないだろうが。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしく願います」

見るからに女子の視線を大量に向けられるこの状況に耐えきれなくなり、簡潔な自己紹介をして早く自分の席に戻ろうとしたというところか。

しかし、お前は有名人なのだ。それだけで許してくれるはずかないだろう。

その後の一夏は教室にやってきた織斑教官とコントをやり、自分の席へと戻った。

織斑教官も有名人だというのは以前調べていたから知っているが、女子の反応からその認識を改めないといけないようだ。一夏に向けられる奇異の視線以上の熱視線を浴びせられ、更にはスポーツ観戦の時以上の歓声が上がっている。

「次は相良志緒。お前だ」

「はい」

ついに俺の番がやってきた。

教卓に立ちクラスメート達を見下ろすが、負けじとクラスメート達に見詰められる。俺は珍獣か？

「相良志緒です。よろしく願います………以上」

趣味や特技を言うべきか悩んだが一夏と同じように簡潔にした。干し肉を造るのが趣味で、銃の分解が得意な高校生がいるものか。するとやはり一夏の時と同じく、もっと語る事はないのかという視線を向けられる。だが、ない物はないのだ。

「あの、相良君？ 本当にそれだけ？」

「はい。これだけです」

きっぱり言うと、横にいる小さい教官——山田教官——が涙目になってしまった。涙腺が弱いのだろうか。

「もういい。相良、下がれ」

「はい」

現在、一時間目の休み時間。俺と一夏は日本に初めてやってきたパンダの気分を味わされていた。

やはり男でISを使えるという事は興味を引くらしく（今までの概念を覆したのだから当然だが）、他のクラスだけでなく他の学年からも廊下に詰めかけている。しかし、遠巻きに見ているだけで話しかけてはこない。

女だけという空間に慣れていたところへ突如放り込まれた男という異物を、どう扱えばいいのか分からないようだ。それもそのはず、この学園に入ってくる奴の大半は女子校育ちだからな。

元より俺は人に見られるのは慣れているから問題はないが、一夏にとってこの状況は酷というものだろう。

「……ちよつといいか」

「え？」

突如一夏に話しかけてきた彼女は確か束さんの妹、篠ノ之箒だったか。

久しぶりに会った幼なじみに何か感慨深いものがあるのか、一夏は何やらだらしなく呆気にとられていたが、直ぐに思い直した。

「廊下でいいか？」

「早くしろ」

「お、おう」

何やら会話をしに廊下に行くらしい。

ふむ、それに俺も参加させてもらおう。久しぶりに会った幼なじみが敵になっていた、なんて可能性がない訳ではないし伝えねばならない事がある。

廊下に出るなりモーセの十戒の如く人の波が割れた。

二人の会話が終わったのを見計らい、そこへ口をはさむ。時間もないので手短に告げよう。

「篠ノ之箒、君の姉から伝言がある」

「……何だお前は」

さっき自己紹介したばかりだろ、という突っ込みは止めておいた。恋する乙女は盲目と、束さんに体験談のように言われた事があるが、あの人が他人に恋をするなんて太陽が今爆発するのと同じくらい有り得ないだろう。

「こいつは相良志緒。最近まで束さんの助手をしてたって」

「あの人の……」

「では伝えるぞ。“箒ちゃん、いっくんと仲良くね！”だそうだ」

伝える事は伝えたので教室へと戻る。それと同時に次の授業が始まるのを告げるチャイムが鳴り、もたもたしていた一夏を織斑教官が出席簿で叩いた。

今日だけで何回叩かれるのだろう。一夏の頭が平らにならなけれ

ばいいが。

休み時間に男同士で休憩していると、声をかけられた。

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

話しかけてきたこの女子はセシリア・オルコット、イギリスの代
表候補生。

ちなみに同じクラスになる生徒の情報は全て集めてある。スリー
サイズなどは集める事は出来なかったのが悔やまれる。そういうの
に興味があるのではなく、スリーサイズなどを知っておけば下着の
中に隠している武器などを素早く探知出来るからだ。

昔、戦地を駆け抜けた同僚はそれに気付かず敵の女兵に……………
っ。今度の休みで花を置いてくるとしよう。

同僚の事を思い出していると、一夏とオルコットの間で話が進ん
でいた。

何でも今は入試の時に教官を倒したか、倒してないかの話らしい。

「女子だけってオチじゃないのか？ 志緒は勝ったのか？」

「ああ」

倒したあの教師の驚いた顔を今でも覚えている。負けるはずない
と思っていたのに負けた、そんな顔はそうそう忘れるものじゃない。

何だか分からないがオルコットが俺を睨んでくる。

「あ、あなたも倒したと言うのですか？」

「何度も言わせるな。何だったら織斑教官に聞くといい、その時見
ていたからな」

「まあ志緒は束さんの助手をやってたから当たり前なのかもな」

助手をやっていたからといってISの操縦が上手くなる訳じゃないぞ。手伝ったと言っても殆ど束さんの実験体みたいな扱いだったし、家政婦みたいな事をしていたからな。

俺に操縦技術を教えたのは俺専用機だし。

キーンコーンカーンコーン

「っ……！　また後で来ますわ！　逃げない事ね！　よくって！？」

いちいちアクセントの多い奴だ。

次の休み時間にもアレと会話をしないとイケないとなると、少々
疲れるな。一夏も大変な奴に目を付けられたものだ。

5話

放課後、俺は一夏にISについて色々教えていた。これはいつもの事なのだが今回は少し事情が違い、基礎知識だけでなくISの操縦方法まで教えている。

理由は簡単。

クラス代表に他薦され、そこへオルコットが自薦してどっちがクラス代表になるかという話になり、ISの戦いで決着を着ける事になったのだ。まあ、それに俺も参加しないといけないんだが。

『はいっ。織斑君を推薦します!』

『クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ!』

『じゃあ私は相良君を推薦しまゝす』

面倒臭そうだったから気配を消していたというのに、面白半分で他薦されてしまった。

まあ、選ばれてしまっても山田教官をやりこめるから良いんだがな。俺は一夏の護衛なのだからそんな物になってる場合じゃないんだ。

ふむ、しばらくはISの操縦方法を教えるのに専念して基礎知識は後回しにするか。とはいえ俺が教えるとしても必要な部分が一つ抜けるので、どうしたものかと考えていると山田教官がやってきた。うっすら汗をかいているから心なしか急いでやってきたように見え

る。

「あ、二人ともまだ教室にいたんですね」

「はい？」

勉強に専念していたからか、一夏は馬鹿みたいな声を上げて反応した。周囲の気配に気付けないようではあまり目を離せないな。一夏と俺は違うから、いつか違う世界へと別れないといけないのに。手間のかかる弟を持った気分だが、不思議と悪い気持ちはしない。

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

ここIS学園は各国の陰謀から生徒を守ろうと全寮制になっており、生徒は全員必ず寮で生活する事を義務付けられている。

だが、俺達の部屋はまだ決まっていないという話だった。しばらくは自宅から通うという話だったが……一夏をくだらない陰謀から守る為か。俺が護衛についているとはいえ限界があるから、なんとかしようと政府が無理矢理変更したという事だな。

俺としてはこの変更はありがたいが、少しの不安がある。

自宅から通うのであれば多少の地の利があったが、それがいきなり知らない場所となるとどうしても一歩遅れてしまう。

少しずつ荷物を運び入れるのと同時に、地形を把握し、罠の設置や確認をするつもりだったんだが仕方ない。

「それで部屋は分かりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備出来ないですし、今日はもう帰っていいですか？」

「あ、いえ、荷物なら——」

「私が手配しておいてやった。ありがたく思え」

狙い澄ましたかのように織斑教官がやってきたが、もしかしてタ

イメージを見計らっていたのだろうか。

「ど、どうもありがとうございます……」

「助かります教官」

「まあ生活必需品だけだな。着替えと、携帯の充電器があればいいだろう」

横で一夏が“日々の潤いが大事だと思うんです”とか考えているようなオーラを放つ。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください」

大浴場があるらしいが俺達という存在を急遽寮に入れた為、大浴場を使う時間を決め手ないので各部屋にあるシャワーで我慢してほしいと言われた。

それに一夏は肩を落としていたが、俺はシャワーがあれば十分だ。外国暮らしが長いから他人と一緒に風呂に入るといのはどうも慣れない。

ちなみに一夏がBLの気があると誤解が流れたみたいだ。まあ、これは任務外だから俺が出張する必要はないだろう。

一夏は1025室で俺は1026室だった。護衛の為に寮に入る時は隣の部屋にしてほしいと、織斑教官に掛け合ったかいるというものだ。それで色々と苦労したらしいから、今度手作りのジャッキーを持って行こう。

鍵を差し込もうとしたら既に開いている事に気付いた。
敵か？

懷からFN Five-seveNを取り出し、息を殺し、ゆっくりとドアを開けこつちに気付いてないのを確認して一気に部屋の中に入り込む。

視界の端にベッドで寝転ぶ人影を見付け、すぐに関節を極めて銃口を突き付ける。

「何者だ。何故ここにいる」

「こ、ここは私の部屋だよ」

そんな馬鹿な。

俺は山田教官に自分の部屋を教えてもらったが、ルームメイトがいるだなんて聞かされていない。

「撃たれたくなくば、言う事を聞け」

「りょかい」

何とも気の抜ける奴だ。

押さえた時に身体チェックをし、武器の有無と筋肉の発達を確認した結果大丈夫だと判断したが一応念の為。

相手の上から離れる。

「両手を頭の上で組み、ゆっくりとこつちを向け」
「はい」

そうしてこつちを向いた相手は確か、布仏本音^{のほとけほんね}だった。すぐに理解したのは珍しい名前だったから覚えていた、それだけだ。

「あ、さがらーだったんだ」

「さ、さがらー？」

束さんの付けた“しーちゃん”並みに理解しにくい呼び名に一瞬
フリーズする。

「うん、相良志緒だからさがらー」

「……………はあ」

スパイとかかと思ったが、この頭が春みたいな奴が敵な訳ないか。
銃をホルスターに戻すと、布仏にマジマジと見つめられた。何か
興味を引くような物……このFN Five-seveNを気にし
ているのか。

「さがらーは何で銃を持ってるのー？」

「いや、それは……」

このマイペースをどうしたものか。簡単に騙されてはくれないだ
ろう、マイペースってのはそんなものだ。

何でも周りの女は相手にしにくいのが多いんだ。仕方ない、
ルームメイトになる以上は隠しきれないか。

「……………秘密に出来るか？」

「うい！」

信用出来ない返事だな。

だけど布仏は本気で言ってるみたいだし……………。

う、そんな目で見るな布仏。

「さがらー？」

「……俺は傭兵だ」

結局折れてしまった。

5話（後書き）

ようやくのほほんさん登場です。しかもルームメイト！
口調はあれで良かったかな？

戦場という世界にいた志緒にとって、のほほんさんは東さんと同じく分かりにくい人間なんです。
これからどうなるのやら

6話

俺が布仏とルームメイトになった傍ら、一夏は篠ノ之のルームメイトになり理由は分からないが怒らせてしまったらしい。何をやったんだ。

何度か一夏が声をかけるが篠ノ之は完全に無視。

一緒に朝食を取るこっちの身になってほしい。ちなみに一夏と一緒に食べてくれと泣いて懇願されたので、一緒に食べている。

「だから、怒っていないと言っている」

ふむ、その言葉通りに受け取るとしたら……一夏が何かやらかして篠ノ之に恥ずかしい思いをさせてしまい、その恥ずかしさから顔を合わせにくいといったところか。

ちゃんとした状況を知らないので何とも言えないがな。

周囲の視線に耐え、篠ノ之の出す空気に耐えていると三人の女子がやってきた。その内の一人は布仏だ。

「あ、さがらーだ。一緒に食べていい？」

「いいか？」

「まあ、いいけど志緒……さがらーなんて呼ばれてるのか？」

「……聞かないでくれ」

何度も止めてくれと布仏に頼んだんだが、聞く耳持たずでまたも折れるしかなかったんだ。

悲痛な空気を俺が出したのか分からないが一夏は肩に手を置く。お前も苦勞してるんだな、そう言われたような気がした。

「うわ、織斑くんって朝すっごい食べるんだー」

「お、男の子だねっ」

「俺は夜少なめを取るタイプだから、朝たくさん取らないと色々きついんだよ」

その食事方法は実に正しい。晩飯を食べた後は寝るだけなので夜は少なめにし、朝を多めに取れば脂肪の付きにくい体が出る。

ちなみに俺は一夏とは違い、食事は常に腹六分目でキープするという方法だ。腹に食事が詰まっていると被弾した時に生存確率が減ってしまうし、満腹状態だと思えば思考能力が低下してしまうから常に腹六分目にしている。

「ていうか、女子って朝それだけしか食べないで平気なのか？」

「わ、私たちは、ねえ？」

「う、うん。平気かなっ？」

「お菓子よく食べるしー」

「……布仏、あまり間食していると太るぞ」

体重を気にするというならその辺りはしっかりと考えるべきだと思う。

「まだ成長期だから大丈夫。あとさがらー、女の子に太るは禁止っ」

「ならツケが来ないようにするんだな」

なんて他愛ない話をしていると篠ノ之が自分のトレイを持って立ち上がる。

「……織斑、相良、私は先に行くぞ」

「ん、ああ。また後でな」

「了解した」

俺の事なんか気にかけてないと思ったが、気にかけていたのか。それでも話しかけなかったのは、一夏とだけ話をしたかったから、か。

「いつまで食べている！」

凜とした声が響く。

こんなはつきりと力強さを感じさせるのは織斑教官しかない。

「食事は迅速に効率よく取れ！ 遅刻したらグラウンド十週させるぞ！」

途端に食堂にいた全員が慌てて朝食の続きに戻った。何故ならこの学園のグラウンドは一周が五キロもある——つまり、五十キロ走らないといけないのだ。

教官、飯をした後にそれは流石に辛いと思います。

もしかして篠ノ之はこうなるのが分かって先に食堂を後にしたのだろうか。

昼休み、色々あったが一夏と篠ノ之の三人で昼食を取る事となった。

一夏が篠ノ之の腕を掴んで行動するものだから、周囲の視線をどうしても集めてしまう。ただでさえ目立つのだから、あまり目立ってほしくないのだが。

更に一夏は篠ノ之の意志を全く聞かずに我が道を行くが、篠ノ之が本気を出せば一夏なんて簡単に投げられるのでそれをしないから、案外悪い気はしてないんだろう。

「そういやさあ」

「……なんだ」

「ISの事教えてくれないか？　このままじゃ来週の勝負で何も出来ずに負けそうだ」

「くだらない挑発に乗るからだ、馬鹿め。それに相良がいるだろ」

まあ俺が一夏に教える事になっているが、幼なじみの篠ノ之がいた方がいいだろう。それに篠ノ之にも教える事があるかもしれないし、何より――

「いや、俺だと基礎を一つ教えられないから篠ノ之にも一夏を鍛えてほしい」

――その基礎を教える事は出来ても、俺はそれを識らないから上手く一夏に教える事は出来ないだろう。こういうのはやはり経験者が教えるのが一番いい。

これを機に二人の微妙な距離を詰めてほしいしな。

「そこを何とか！」

「俺からも頼む、篠ノ之」

二人で頼み込むと篠ノ之はしばらく唸り、そして渋々といった感じで頷いた。

これで一夏とオルコットとの戦いが見れるものになるだろう。

そう思っていた時期があった。だけど現実とは常に残酷でいくら頑張っても出来ないというか、頑張る事すら出来なかったというか。

「――なあ、箒」

「なんだ、一夏」

二人は練習している間に名前呼び合う仲に戻っていた。

「気のせいかもしれないんだが」

「そうか。気のせいだろう」

「ISの練習はどうなったんだ？」

「……………」

「目をそらすな」

篠ノ之が俺と一緒に一夏を鍛える事になって六日が過ぎ、一夏はISの練習を一度も出来なかった。やっていたのは全て剣道。

何度も見かねてISの練習をさせようものなら篠ノ之に邪魔をされ一日が潰れ、ならば篠ノ之の心ゆくまで剣道をさせた後にISの練習させようとしたら使用時間を過ぎ、といった具合に一夏は実戦の知識を得る事はなく今にいたる。

篠ノ之を簀巻きにして一夏を練習させようかとも思ったが、篠ノ之は依頼主の妹なのでそんな事を出来るはずもなく。

そして今日、オルコットとの対決の日。

練習が出来てない上に、一夏のISすら届いていない。この状況でどう戦えと。

無言の空気が流れる中、山田教官がやってきた。

「ついに織斑くんの専用ISが来ましたよ！」

「え？」

「織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな」

女性陣に押されてピット搬入口の方へ行くと、その奥に一夏の専用ISが鎮座していた。

「これが織斑くんの専用IS“白式”です！」

「体を動かせ、すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフィッティングは実戦でやれ」

「お言葉ですが教官、一夏と自分が戦う順番を変えていただけませんか？」

「何故だ相良」

「流石にフォーマットとフィッティングを実戦でやらせるのはキツいかと」

「……いいだろう。ちょっと待ってろ」

よし、これで時間を稼げる。俺が戦っている間に一夏は一次移行を済ませ、ついでにオルコットの戦い方を理解するだろう。

オルコットは代表候補生で、一夏は今年初めてISを動かしたという戦力差を考えるとこれぐらいの工作は問題ないはずだ。

「……向こうもオーケーを出した。行ってこい相良」

「了解です」

「頑張れよ志緒」

「応援する暇があるなら白式と向き合え」

何の為にこうしたと思っているんだ。

「相良君なら大丈夫ですよ」

「その、負けるな」

頷いて答える。

アリーナへと続くゲートを通ると同時にチョーカーに触れ、IS
に呼びかけた。

行くぞ、アル。

《了解です軍曹》
サージェント

7話（前書き）

IS バトルをざっくばらんに説明すると、相手のエネルギーを零にした方が勝ちとなる。

またISには操縦者が死なないように“絶対防御”という機能が備わっており、あらゆる攻撃を受け止める代わりにエネルギーを極端に消耗する。

7話

第三アリーナ。

何処からか志緒達の戦いが見れると情報が漏れたのか、観客席には大量の生徒が座っていた。

ゲートが開くと同時に観客が歓声を上げる。だが、出て来た志緒と志緒のISを見てすぐにその歓声は消えた。

シャープで力強いシルエット。

ナイフのように鋭い面構え。

獲物を見付けたら絶対に逃がさない——そういった冷たい獰猛さ。

“世界一危険な芸術品”に興味と恐怖を一度に味あわされた。

アーバレストに搭載されたAI“アル”が個人間秘匿通信で情報を送ってくる。
ブライベート・チャンネル

《あの機体は中距離を得意としており、特殊装備を持っています。

私達の天敵と言えますが、Λは使用しなくとも勝てます》

《ならΛはいいだろう。しかし、油断はするな》

《その言葉を軍曹殿にお返しします》

《うるさい》

コントのような応酬を終え、意識をセシリアへと向ける。

鋭い気配を浴びせられたセシリアはすぐに気を取り直し、睨みつけるように得物のレーザーライフル“スターライトmk?”を志緒へと向けた。しかし、志緒の気配に圧されたのか手が震えている。

試合開始の鐘が鳴る。

ISに搭載されたハイパーセンサーで志緒の隙を狙おうと探すが、見つけたのは隙ではなく別の物だった。

フルアーマーに近いアーバレストの機体の何処にも、スラスターがない。

「飛べないISでこのわたくしと戦おうと言うのですか？」

それは見栄張りの嘲笑だった。嘲笑をして自分を鼓舞しなければ、また志緒の鋭い意識に負けてしまうから。

「飛ぶ必要がないからな」

そう、この機体は飛ぶ必要はない。

声を聞いたと同時にセシリアは吹き飛ばされていた。

アーバレストの武器によるものなのかと思い、さっきまで志緒がいた場所を見るが何もない。次に自分がいた場所を見ると、そこに落下している志緒がいた。

飛ぶ必要がない。

落下している志緒。

学生とはいえセシリアも代表候補生。この二つのファクターからすぐに志緒が何をしたのかを理解した。

攻撃方法までは分らないが、志緒は地上から十メートル以上も離れた場所に浮いているセシリアまで“跳んだ”のだ。

ただの跳躍で十メートル以上も跳ぶアーバレストのスペックに冷や汗が流れる。もしもあの機体にスラスターなどが装備されている、勝機なんてないだろう。

いくら十メートル以上も跳躍出来るとはいえ、それはどうしても直線となってしまうのでその瞬間を狙えばいい。

そう思いセシリアはまず四つの自立起動兵器“ブルー・ティアーズ”を展開した。

余談だがセシリアのISの名称ブルー・ティアーズはこの自立起動兵器からきている。

自立起動兵器がありとあらゆる角度で志緒を狙い、砲口からレーザーを放つが当たらない。どれもギリギリで躲されている。

「アル、単分子カッター」

《ラジャー。単分子カッター展開》

右手にコンバットナイフが展開され、刃の部分が高速振動して高周波音を響かせる。

ライフルと自立起動兵器の隙を狙い、跳躍。

かかりましたわね！

膝を撓ませ（たわませ）て力を溜めたのを確認し、跳躍する角度を計算し予測。予測した空間を自立起動兵器で撃ち抜こうとしたが、レーザーは何にも当たらなかった。

アーバレストのスペックを完全に読み違えていたのだ。

自分に影を落とす正体に気づき、見上げる時には既に遅く左肩を単分子カッターで斬り裂かれる。

反撃しようと自立起動兵器を向けるよりも早く、志緒はセシリアを蹴って地上に着地。レーザーが何もない空間を焼く。

志緒に一撃も入れられないまま、十分が過ぎた。まだダメージを

受けてない志緒に対し、セシリアはあと一撃でエネルギー残量が空になる。

まるで忍者ですわね。

アーバレストの素早さからそう思う。もしくは地上を走る燕だろうか。

白い閃光となってアーバレストが駆ける。閃光の尾をレーザーが焼くが所詮は閃光の尾を焼いているだけで、アーバレストには掠りもしない。

普段なら怒りが沸いてくるのだが、不思議とセシリアの心には怒りではなく落ち着きに似た諦めだった。毒を持たない蟻が象に勝てないのと同じで、セシリアは志緒に勝てないと理解してしまったのだ。だが、代表候補生として無様な姿は見せられない。

そう考えた時にはもう、彼女は沈んでいた。

Aピットに戻ってくると山田教官と一夏に、凄いだの何だのと褒められた。入学試験の時に見ていたからか織斑教官は当たり前といった顔をしている。まあ教官からお褒めの言葉をいただけたとは思ってないので、問題ない。

十分ほどこしか時間を稼がなかったが、それでも白式の初期化や最適化は済んだだろう。済んでいなかったら撃つ。ブルー・ティアーズの装甲を斬り裂いただけなので、オルコットの方もすぐ戦えるだろう。

「さて、次は一夏の番だぞ」

「うっ、プレッシャーかけるなよ」

「男子たるもの軽く乗り越えてみせろ」

「アリーナの使用時間が限られてるからさっさとしろ」

「頑張って下さいね織斑君」

プレッシャーをかけるなど一夏は言うが、真に強い者はプレッシャーと冷静の狭間で戦うという。だから俺達は頑張れとプレッシャーをかけるんだ。

気合いを入れる為に一夏が自分の頬を強く叩く。

「よし、行ってくる」

ゲートが開き、その向こうへと一夏は向かっていった。

8話（前書き）

軽く汗を流した後、ベッドに倒れ込むように寝転がる。

セシリアとの戦いは楽勝だったがどこか危ないものがあつた。やはり地上専用のアーバレストで空中にいる敵と戦うのは不利なのだが、だからといって空戦に対応出来るような武装は積み込む事が出来ない。

容量が圧倒的に足りないのだ。もう少し容量が空いていればフライトユニットを入れるか、遠距離用の電磁砲でも入れるのだが。

空きを作る為にシステムとかを削除したいとこだが、それだとアーバレストが機能しなくなるので本末転倒である。

「やはりラムダ・ドライバが大きいな」

《肯定です。しかしラムダ・ドライバは他のシステム同様削除しては私は動きません》

「今更だがあの人もよくこんな欠陥品をくれたものだ」

《軍曹殿なら出来ると思ったから私をプレゼントしたのでしょう》

それは過度な期待だ。

もしも俺に適性がなくてアーバレストを動かせなかったらどうするつもりだったのだろう。

まあ考えるだけ無駄か。

天才とかの考えを凡人が理解しようなんて、宇宙に空気を求めるのと同じくらいに無意味すぎる。

送る事は出来ないが今までの癖でつい報告書を作成してしまう。

その日一夏に接触してきた人物のリスト、一夏の行動、勉強内容、エトセトラエトセトラ。

《軍曹殿、ルームメイトが帰ってきたみたいなので電源を切る事をお勧めします》

「お前もスリープしている」

《了解》

あまりアルの存在を知られたくはないので、人の目がある時は基本スリープしている。ISにAIを積むのは珍しい上、アル自身が特別だから知られる訳にはいかない。

電源を切り、パソコンを隠す。

あのぼやぼやとした布仏が勝手に俺のパソコンを起動させるとは思わないが、それでも用意周到にしておくに限る。

「ただいま」

「ずいぶんと遅かったが、補習でも受けていたのか？」

「酷いなさがら。補習してたんじゃなくて、お菓子食べてたの」

「夕食前に食べて大丈夫か？」

「お腹空いたらお菓子食べるもん」

だから、それだと太ると何度も言っているんだがな。何度も忠告するが布仏は馬耳東風といった感じで俺の話を聞かない。

ベッドに布仏がダイブする。

たいして興味を持たないが、それでもスカートが捲れるので出来れば止めてもらいたい。布仏に会いに来た友人に見られ、あらぬ誤解をされてしまえばこれから動きにくくなる。

「さがらーもトッキー食べる？」

「また菓子食べているのか。いや、遠慮しておこう」

毎日の授業とトレーニングで一日のカロリーを消費している為、受け取ってもいいがああいうのは糖分と脂質が多いので止めておく。何故遠慮したら布仏は俺をそんなに睨んでいるんだ。元が元だから恐いという印象はなく、むしろ可愛いという印象が強い。

「むー、さがらーは固すぎだよー。例えるなら外に放置して固まったご飯ぐらいだよー」

何とも分かりにくい例えだ。俺がアジア文化を知らなければその例えに反応出来ないというのに。

「いいもんいいもん。そんなさがらーにはお菓子上げなーい」
「だから何を拗ねているんだ」

これだから束さんといい布仏といい、女の考えは分かりにくいんだ。もう少しシンプルに動けないものか。

8話

クラス代表を決める戦いの翌日。山田教官の言葉に一夏が呆気に取られた。

「では、一年一組代表は織斑一夏君に決定です」

女子の歓声が上がる。

どうも俺はこの雰囲気はまだ慣れないようだ。まあ、今までが今までだったから仕方ないのだが、ここに通うからには慣れないといけないのだろう。最低でも一夏が卒業するまでは。

「先生、質問です」

「はい、織斑君」

「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になってるんでしょうか？」

そう、一夏は結局昨日の試合で負けてしまった。オルコットの戦い方を理解したが、自分の武器の特性を理解してなくて負けたのだ。何とも情けない結果。

試合を終えて帰ってきた一夏を、俺と織斑教官が口撃したのは言うまでもない。与えられたチャンスを上手く活かしきれなかった奴のせいで、部隊が全滅なんて事はよくあるからな。

「それはわたくし達が辞退したからですわ！」

教官が訳を説明しようとしたらオルコットが遮った。何時も何時も思うんだがその無駄に溢れた自信はどこから来るんだろうか。自信に溢れているのは変わらないが、何故か昨日までのトゲトゲしい

雰囲気は失せて心なしか友好的な雰囲気を持っている。

昨日今日でいきなり手の平を返す奴は信用ならない。腹に何を飼っているんだ。

まあオルコットの变化はそこら辺にでも投げといて、今はオルコットに押され気味の一夏を助けるとしよう。

「お前は良くも悪くも人目を惹きつけるんだ。だから強くする為に戦闘経験を増やそうと、クラス代表に選ばれたんだ」

「で、でも俺はまだ基礎が――」

「織斑教官には話をつけてあるから手遅れだ」

「――嘘だろ」

意図して手に入れた訳ではないが一夏、お前は他の者とは違う力を手に入れた以上はその力を使いこなせるようにならなければならぬ。何かを失った時に“もし力を使いこなせれば”なんて後悔をしない為にも。守りたくても………守れない人は沢山いるんだからな。

だから立ち止まる事は、逃げる事は許さない。いや、許されないんだ。

「そう言って逃げるのか？」

「何だって？」

「お前は力を欲した、そして力を手に入れた。なのに逃げるのか？」

「……………そうか、俺は逃げていたのか」

何時までもおんぶに抱っこは嫌だ、と言ったのは一夏自身だろう。

「クラス代表やります！」

代表をやる事宣言の後、篠ノ之とオルコット以外の女生徒が沸き

立つ。

コホン、とオルコットが咳払いをしてクラスが一度静まり返り、全員の視線が教室の一点に集まる。

「わたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がIS操縦を教えて差し上げれば、それはもうみるみるうちに成長を遂げ――」

机を叩く音が言葉を遮る。主は篠ノ之だ。

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。私が、直接頼まれたかな」

言っている事は正しくそれを振りかざすのは問題ないが、何故に篠ノ之は酷い敵意をむき出しにして、オルコットも挑戦を受け取ったような顔で睨み合うんだ。二人の間に見えない線香花火、じゃなく火花が飛び散る。

事の原因である一夏は二人の深層心理にある原因が自分だと気付いてないのか、我関せずといった風に二人を冷静というかボケーツと傍観している。あれは苦勞するな。

互いのISランクについての応酬が始まり、一夏が巻き込まれて騒ぎが大きくなり始めた。横で山田教官が慌て、影ではトトカルチヨが始まりなんとも混沌としている。

いい加減に止めようかと思って立ち上がると同時に、出席簿が女子二人に落ちた。相手が女という事だろうか、一夏の時と比べると音が軽く感じる。ついでに一夏にも落ちた。

「お前たちのランクなどゴミだ。私からしたらどれも平等にひよっこだ。まだ殻も破れていない段階で優劣を付けようなどとするな」

貴方からすればそうなのだろうが、言い過ぎではないだろうか。
しかし、織斑教官のこの言葉はまだ言い方だ。まあハートマン軍曹
と比べる事自体が間違っているんだが。

どうでもいいが、また一夏が叩かれた。この学園に来てから一夏
の脳細胞はいいいくつ壊れてしまったのだろうか。

「うう、千冬姉がポンポン叩くから頭が平らになった気がするぞ」
「全部一夏が悪いだろ。俺が教えた事全て忘れてるんだからな」

入学する前から一夏に教えてきた知識が引き出せないとはどうい
う事だ。そのせいで授業中に何度も織斑教官の出席簿に頭を悩ませ
ていた。

姉が姉なら弟も弟だな。根元が体育会系だからか頭を使うよりも
体を動かす方が性に合うらしい。

アリーナの許可が取れたのを確認してピットで着替える。
一夏がクラス代表になった事で最近は一夏の知識よりも、操縦の
方を重点的に鍛える事になっているんだが、一夏の腕はあまり向上し
ているように思えない。

せめてもう少し考えて動けないものだろうか。

「志緒はデータ取る必要がないから良いよな。俺も志緒みたいなス
ーツが良かったよ」

「ここだけは束さんに感謝だな」

女性にしか扱えないISを男が扱えるという事で、一夏が着るI

Sスーツはデータを取りやすくする為に全身ピッタリの形をしており、体に密着するので通すのが難しく着替える際にかなり苦労している。

対して俺は束さんが裏から手回ししてくれたらしく、データを取る必要がなく臍の辺りで上下に分かれたセパレートタイプだ。一夏みたく密着しなくて好きなんだが、上の裾が短く臍が出るのがどうも気に入らない。企業にスーツを頼むと一夏みたいなのが送られ、束さんに頼むと同じような物が来るので諦めたが。

時間が限られているので着替え終わるなりアリーナ内へと向かう。

「基礎は出来てきたから今日から実戦形式でやっていくぞ」

「あ、ああ。ようやくあの地獄のような特訓が終わるのか……………」
助かった」

「お前の理解がもっと早ければ実戦形式に移ったんだがな」

何故ISが空を飛ぶのか等を理論で説明しても一夏の頭では理解出来ない判断したので、俺はとにかく実践あるのみとスパルタ気味に一夏をISと触れさせた。クラス代表戦までに何とか使える物にしないと、織斑教官に何かされそうで怖かったからな。

チョーカーに触れ、アルに小声で呼び掛けるなりアーバレストが展開される。所要時間は0.42秒とまあまだ。

一夏が右腕を突き出してガントレットを左腕で掴み数瞬して白式が展開された。ギリギリ一秒を超えなかったが、次からはもっと早く展開させるようにしないとな。

ちなみに余談だが、待機状態のISは基本アクセサリーの形状を取って待機する。アーバレストはチョーカー、オルコットのは左耳のイヤークラスと……………なのは一夏のは右腕のガントレットと防具である。

「先手を譲るから攻撃してこい」

「行くぜ志緒！」

馬鹿みたいに正面から突撃して近接ブレードの雪片で縦に三日月の軌跡を描くが、直線過ぎる攻撃を躲すのは難しい事ではない。右足を下げて半身になって雪片を躲し、先に展開していた散弾砲のボクサーを一夏の右脇腹に撃ち込む。

「クソッ！」

超至近距離でボクサーの弾を全て受けたからか絶対防御が発動し、一夏のエネルギーが三分の一まで減った。

素早さとワンオフにより攻撃力の高さは優秀だが、防御においては一般ISよりも低いみたいだな。そこも考えて一夏の戦術を組み立てるとしよう。

体勢を立て直した一夏が再び斬りかかるが紙一重で全て躲す。良くも悪くも一夏は正直過ぎるから攻撃にもそれが表れて躲すのはかなり楽だ。

単分子カッターで流し、避け、全てを無効化していく。こういう時に遠距離武器を持たないのは辛いな。

大振りになった横薙ぎの一撃を懷に潜り込む事で躲し、隙だらけの体に単分子カッターを刺して一夏のエネルギーが尽きた。

「今の戦いでなんで負けたのかちゃんと分かるか？」

「攻撃を全部読まれてたからか？」

「そうだ。一夏の攻撃はフェイントが入らないからどうも直線的な攻撃になり、分かりやすいんだ」

それに猪みたいに毎回毎回突撃じゃ読むのは簡単過ぎる。

「このままの戦いを続けていけば遠距離武器を持たないから、一度離されたら負けが確定するな」

インファイトを続ける事が出来れば勝率も高くなるだろうが、今の一夏の腕では逃げられて集中放火を受けるだけだ。

これはオルコットの手を借りて遠距離を得意とする敵との経験を増やすしかないか。

9話（前書き）

久々の更新です

9話

それは突然の事だった。

いきなり俺のパソコンに束さんからのメールが送られ、開くと少しの間だけ別の任務に就いて欲しいという内容だった。俺がいない間は別の人間が一夏を守る為、安心して仕事をしてきてほしいとの事。

彼女は俺の雇い主な為にその言葉を請けるしかない。

この事を教官に端的に説明すると、渋い顔をされたが何とか学園側には手回ししてくれると言ってくれた。しかし、出席日数が危なくなっても知らないと言われてしまった。補習で良い点を取らないとマズいか。

「死ぬなよ、とは言わんがなるべく生きて帰る努力をしろ」

「了解しました」

そんな訳で俺は北の大地に来ていた。

「敵部隊の壊滅が今回の任務で間違いないな？」

《肯定です。束博士の研究内容を奪おうと、何度もちよっかいを出してきたので煩わしくなったのでしよう》

別に俺じゃなくても良かったような気がするのだけど。あの人なら無人兵器でも作り、それで敵を倒すとか大陸弾道ミサイルでも飛

ばすとかしそうだが。

まあ、依頼された以上は文句を言わずに遂行するのが傭兵というもの。

「さて、どうしたものか」

安全性を考えるのならアーバレストを使うのが一番だが、あまり顔を出すのは得策ではないよな。こういう時にジャミング機能がないと厄介だな。

この身一つで敵陣内部から食い破るしかないみたいだ。元々そういう戦いを得意としているとはいえ、安全策が使えないというのはな。

アーバレストの頭部に設置されたハイパーセンサーのみを部分展開し、敵陣を離れた場所から観察してみるが地雷などの対人兵器はないみたいだ。ふん、罠か。

「それで、いつまで見ているつもりだ」

先ほどこらずと木陰から視線を向けてきた相手に問いかける。利き手は既にホルスター内の銃に触れており、ハイパーセンサーで視線の主の一挙手一投足を見逃さない。

「あら。もしかしてウルフさんですか？」

「た、大佐殿!？」

木陰からリスのようにひょこっと出てきたのは以前、まだフリーランスの傭兵をしていた時に何度か契約をした軍の大佐――テレサ・テストアロッサ殿であった。

彼女は前線で戦うほどの戦闘力はなく、後方で指揮を取る事に特化した方なのだが、何故このような場所に来ているのだろうか。

「もしかしてウルフさんもパンドラを狙っているんですか？」

「……肯定です。あと、今はウルフではなく相良志緒です」

アルが口を持たないのに何か言いたそうにしているが、チョーカイを叩いて静かにさせる。

「そういえば篠ノ之博士の助手をしているんでしたね。ちょっと妬けちゃいます」

「は？」

「だって契約していた時の相良さんは、“一つの場所に長居をしたくない”と言って任務が終わるなり去っていったじゃないですか」

ああ、言われてみれば確かに昔の俺はそうだった。何故そのように風来坊みたいな生き方をしていたのか覚えていないが、今の俺から考えるに昔の俺は歯車として生きなくなかったんだろう。長居すればするほど愛着を持ち、組織の一員として使われ、死ぬその時まで歯車として生きるはずだ。それが嫌で、俺は長居をしなかったのだろう。

だがしかし、今の俺は歯車として生きているのではないだろうか？

束さんの助手という役職を持ち、IS学園の生徒として行動している俺は、昔の俺が嫌っていた歯車として生きる俺だ。今と昔を変えたのは、何がきっかけだったのだろう。

「話を変えますが、何故大佐殿がこのような場所に護衛なしでおられるのですか」

「最近ミスリルも人員不足でして……今回は私ともう一人の少数精鋭で叩こうという話になったんです」

言外に“俺がいなくなったから”と込められているような気がしたが、それは自意識過剰というものだろう。

「しかし、そのもう一人とやらは大佐殿を放っておいて何をしているのですか」

「ちょっと偵察に行ってもらってるんですよ。彼女なら安全ですし」

嫌な予感がする、それもとびっきりの最悪で災厄な予感だ。大佐殿が偵察任務で信頼している相手となると数が限られ、さらにその相手が女性となると一人しか思い浮かばない。

確かに彼女の冷静さと小柄な体格があれば偵察任務なぞ簡単だろうが、敵を叩こうという任務に彼女を連れてくるべきではない。俺の心労的にも。

「……狙いは一緒みたいですが、手を組まずに別行動させてもらいます」

今は一刻も早くこの場から逃げ出したい。そして彼女と出会いたくない。

「わざわざ危険な方法を取らないで、安全策が練れるならそっちの方がいいですよ」

「いや、しかし――」

「はうゝ、大佐助けてくださいゝ」

「――来てしまったか」

少し離れた場所から灰色がかった髪をツインテールにしている子供が、何故か犬に追われてこっちに向かって来ている。どうやら子供が持っている紙袋の中身は食料のようで、それを腹を空かした野良犬が追いかけているといった状況らしい。よほど腹を空かしてい

るのか、それとも子供が弱いと思って追いかけているのか。

気付いてほしくなかったが、子供が俺に気付いて顔を輝かせる。そんな反応をされてしまったては無視する事が出来ないじゃないか。ホルスターから銃を取り出し、サイレンサーを付けて野良犬に威嚇射撃を行う。

キャインッ

威嚇射撃に驚いた野良犬は子供を追いかけず、来た道を全力で逃げていった。

追われるのが嫌ならその紙袋の中身を放り投げ、野良犬がそれに食いついている間に逃げればよかったのだ。まあ、そう判断できないほど慌てていたのだろうか。

子供は大佐殿に助けを求めて走っていたのに、俺に気付くなり進路をこっちに向けて走っていた。その勢いは眼前まで近付いても止まる事はなく、まるで一昔前前の大砲のような突進を俺にかます。

「助けてくれてありがとうね志緒君」

キラキラした笑顔をこちらに向けてくるこの子供は――竹内理緒。ミスリルの女兵士であり、得意なのは偵察任務と爆破関連技術。特徴はなんといってもその見た目である。見るからに小学校高学年にしか見えないが、それでも俺と同じ年という合法ロリータである。

「私幼女じゃないよ、志緒君と同じ年だもん！」
「勝手に人の思考を読むな」

あと、どういう事か懷かれている。

話を戻そう。

こうして理緒に出会ってしまった以上は、二人と組んで敵を叩いてしまった方が安全である。出会わなければ別行動をしていたんだが。

「理緒一人で突入となると、ブラウニーを持ち込んでいるのですか？」

「ええ。その方が安全ですから」

ブラウニー。本来ISは各国に属する組織にしか与えられないのだが、何故かどの国にも所属していないミスリルが持つ機体だ。ブルーティアーズ同様に中・遠距離を得意とする機体だが、他のISにはない奥の手がある変わり種な機体だったはずだ。

しかしブラウニーを持ってきたのであれば、大佐殿はわざわざ来ずとも母艦で送られてくる情報から戦略を組み立てれば良かったのでは、と思い進言してみると今気付いたという顔をした。まあいい。

「ブラウニーがあるならこちらもISを使える。あんな研究所にISがあるとは考えにくいから、一時間でもかからずに制圧出来ます」

「大佐は安全な場所で待機しててくださいね」

「分かりました。ご武運を」

大佐殿が見えなくなるまで離れたのを確認し、意識を今までの感覚から切り離して本来の感覚と入れ替える。それは理緒も同じよう。幼い雰囲気はなりを伏せ、今は完全に一介の兵士としての面構えをしているんだが、やはり幼女だ。

「さて、大佐殿にああ言ったがISを使うのは危険だな」

「ブラウニーのシステムを使っても、使う前のまでは影響がいかな

いからね」

「となると、やはりこの身一つで潜入だな」

「昔みたいにあたしが陽動で、志緒君が内部破壊だね」

昔ミスリルに買われていた頃、俺と理緒は性格の相性とは別に動き方の相性が良かったので、よく一緒に組む事が多かった。理緒が得意の爆破物で敵の注意を引きつけ、俺が敵陣深くまで噛みつくという戦い方だ。

「死なないでね志緒君」

「聞こえないな、そんな寝言は。俺達はいつ死んだっておかしくない立場なんだからな」

人生はいつだって死と隣り合わせで、傭兵なんて職業は死と腕を組んでる状況なんだ。だからそんな寝言なんか聞こえない。

はう、久々に会った志緒君格好良くなってたな。昔みたいなトゲトゲしさはなくなったけど、その代わりに取っ付きやすさがにじみ出てるっていうか。あたしとしては今の方がいいかな。

「こっちだ！」

爆破騒ぎにかられて研究員やら黒服の男達がやってくるけど、何も考えずにあたしの場所まで来るのは駄目ですよ。敵意に飲まれるんじゃないくて、敵意を飲み込まないと周囲を見渡せずに足下が疎かになるんだから。

ピンッ

男達の誰かが足下に張られたワイヤートラップに引っかかり、ワイヤーの先に繋がっていたクレイモア地雷が作動する。中の鉄球がアトランダムに男達へばらまかれ、鉄球をくらった男達が一人残らず倒れていく。

ワイヤートラップと連動したクレイモア地雷はオタワ条約で禁止されてるけど、あたしが所属しているミスリルはどこかの国に所属している訳じゃないから大丈夫。それにこの研究所は国に所属していても、研究内容が内容だけに公に出来ないからもっと大丈夫だも
ん。

次々と敵が出てくるけど、その全てを得意の爆弾で全部処理していく。こんなに多いとゴキブリを思い出すなあ。

「志緒君の為にも頑張らないとね！」

そういう訳で爆弾の数を増やしましょう。

理緒の陽動が派手でこっちまで注意があまり向かないから楽なんだが、世間常識からするとそれはどうなんだかな。

この研究所の主要な柱に爆弾を設置して理緒を回収するなり爆破するのが目的なんだが、はたしてそれだけで研究が途絶えるんだろうか。末端だけを破壊しても根元を破壊しなければ意味ないが、そうするとなると時間が足りないんだよな。学生との両立は大変だ。

「武器を捨て、手を上げてゆっくりとこっちを向け」

気を抜いたつもりはなかったんだが……まあ、これも想定内だ。こんな危険に遭遇しないと暇でしかないんだよな。銃を落とし、両手を上げて振り向くと俺に銃を向けたムキムキマッチョな黒人男性がいた。見ているだけで体感温度が上がりそうだ。

あの筋肉は文字通り鎧として機能しそうだから、隠し持ってるナイフじゃ通用しないだろう。通用させるには接近して柔らかい部分である目か、喉を斬るしかないが出来るか微妙だ。

「まさかこんな子供にやられるとはな。だが、それもここまでだ」

どうやら向こうは俺が世間を騒がせた相良志緒だと気付いてないみたいだ。戦場であらうとなかろうと、世界の情報を持っていれば話題のタネになるし、交渉に使うネタにもなるというのに男は持っていない。それがどんな結果を生むのか知らないのだろうか。

「アル、右腕だけ部分展開」

小声でアルに命令する。どこからともなく現れた粒子が俺の右腕を包み、男が慌てて引き金を引こうとするがもう遅い。

体を捻らせながら踏み込み、部分展開した右腕で男の腹部に拳を叩き込む。部分展開しているだけなのでISのバックアップはほとんどないが、遠心力で威力が増した鋼鉄を叩き込まれてはどんな相手だろうと気絶する。

捻って銃弾を躲したつもりだったが、一皮分だけ掠っていたらしく朱い線が額を走り、そこから血がとめどなく流れていた。額の傷だから出血が派手だが、傷は浅く応急処置として布を巻いておくだけでいい。傷が残るかもしれないが今は時間が惜しい。

「あと何ヶ所に爆弾を設置すればいい」

《次の角を右に曲がった先の部屋に設置すれば完了です》
「そうか」

爆発音があまりしなくなってきた事を考えると、理緒の方であらかたの敵を倒したという事が、陽動だという事がバレたかのどちらかだ。もし後者なら既に逃げられてしまっているかもしれないが、それでもこの研究所を破壊しておくにこしたことはない。これだけの研究所となると建設と機材にかなりの費用を投資していたはずで、それを失ったとなると後ろで手を引いている連中が焦るかもしれない。もしも焦るような黒幕であれば、そこからボロを出して全滅なんて事になるかもな。

指示通りの部屋にたどり着くと、そこに独りの少女がいた。囚人のように手足を枷で封じられ、何度も注射をされたような跡が目を引き。そして何より生きる事を諦め、怯える瞳。

「また、実験をするの？」

その言葉で何が行われていたのかを理解し、近くにあったコンソールからデータを引き出すようにアルに命令。俺は持っていたピッキング道具で少女の枷を外す。

《軍曹殿の考え通りです。ここは最強のIS乗りを生産する為の実験場であり、各国から高い適性を持つ子供を誘拐し、その肉体を改造・分解してデータを集めるだけの研究所と出てきました》

俺は正義の味方なんてつもりはないが、それでも怒りを隠しきれなかった。傭兵にあるまじき感情だが、その理性を感情が塗りつぶしていく。こんな感情を抱ける俺はまだ幸福な人生を生きてきたのだろう。もしくはあの少年とともに過ごしたからか、あの熱さが俺

の中にも灯ってしまったのか。

だから、俺は生きる事を諦めた少女に提案した。

生きたいか、と。

案の定少女は面食らった顔をし、今までそんな言葉を言われてこなかったからか返事が出来ないでいる。

「死にたいのなら俺が今殺してやる。だが生きたいのならその足で立ち上がり、その手で未来を掴み取れ。二つに一つだ」

これは俺のエゴだ。ここでこの少女を見捨てても任務に問題はなく、むしろ見捨てた方が荷物を背負うことなく安全に事を進められる。だけど見捨てられない。

「私は生きて、いいの……?」

「それを決めるのはお前だ。生きたいのなら生きろ、死にたいなら殺してやる」

「生き………たい、生きたいです!」

「分かった」

少女の手を引いて立ち上がらせる。とりあえずは理緒と合流してこの子の未来を考えよう。

「——と、いう訳です」

あの後合流した俺達は大佐殿が待つポイントまで移動し、俺が見た事、感じた事を全てを話した。すると二人は顔を見合わせ、何故かかなり驚いた顔で俺を見る。

「やっぱり相良さんは変わりましたね」

「昔は機械みたいに冷たく、任務第一だったのにね」

「俺でも不思議に思ってる」

人らしさを手に入れたと言えば心地良く感じるが、それは傭兵として大切な物を失ったとも言える。この変化ははたして進化なのか、それとも退化なのか。

「それで大佐殿には、この子が平和に暮らせる環境を用意してほしいのですが」

「分かっています。この子が二度と狙われないよう手を尽くしますよ」

「感謝します」

これ以上いても何もする事がないし、出席日数をあまり減らしたくないので礼を言ってお立ち去ろうとすると、服の裾を掴まれた。振り返ると少女だった。

「もう行くんですか？」

「俺にはやらなくてはならない任務があるからな」

不安そうに見つめてくる少女の頭を撫でる。初めてやる行為だったので優しく撫でるという事が出来ず、撫でた部分がボサボサになってしまい少女が慌てて直す。それを利用して逃げた。

後ろで何か騒がれてるが、まあ問題はないだろう。

《何も言わなくて良かったのですか？》

「あの子が生きる世界は幸せでなくてならない。そこへ傭兵なんかが入ってはいけないんだ」

《軍曹殿が言うのなら何も言いません》

「助かる」

さて、今から日本へ帰る飛行機が取れるだろうか。取れなければ船になるだろうが、極力飛行機で帰りたいものだ。

代わりの者が守っているとはいえ、やはり護衛対象から長期離れるというのは落ち着かない。

早く帰ろう、日本へ。

9話（後書き）

順当に行けば中国のターンでしたが、作者があまり好きじゃないのでターンはなかった事になりました。

次回は一卷ラスト、謎の機体による襲撃の話になります。

早く更新出来たらいいなあ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3225t/>

White Employing Mercenaries

2011年12月5日09時51分発行